ラビの贈り物

M. スコット・ペック

これは物語、おそらく神話だ。神話によくあることだが、この話には多くのバージョンがある。これもよくあることだが、私が語ろうとする物語の出典は曖昧である。いつどこで聞いたのか、読んだのか、思い出せない。さらに、私がこの物語にどのような歪曲を加えたのかもわからない。確実にわかっているのは、このバージョンが『ラビの贈り物』というタイトルとともに私の元に来たことだけだ。

この物語は、苦境に陥った修道院に関するものである。かつて偉大だったある修道会は、17世紀から18世紀にかけての反修道会迫害の波と19世紀の世俗主義の台頭の結果、すべての分院を失い、朽ち果てた母院に5人の修道士しか残らないまでに衰退していた。修道院長と4人の修道士であり、全員70歳を超えていた。明らかに瀕死の修道院だった。

修道院を囲む深い森の中に小さな小屋があり、近くの町のラビが時々庵として使っていた。老修道士たちは長年の祈りと瞑想を通して、少し霊感が強くなっていたので、ラビが庵にいる時はいつも察知することができた。「ラビが森にいる、ラビがまた森にいる」と彼らはささやきあった。ある時、修道会の死が目前に迫っていることに苦悩していた修道院長は、ラビの庵を訪れ、修道院を救うかもしれない助言を請うこと
を思いついた。

ラビは自分の小屋で修道院長を歓迎した。しかし、修道院長が訪問の目的を説明すると、ラビはただ同情することしかできなかった。「その気持ちはよくわかります。人々が魂の抜け殻のようになってしまう。私の町でも同じです。ほとんど誰もシナゴーグに来なくなりました」老修道院長と老ラビは共に泣いた。そして二人は聖典の一部を読み、静かに深い話をした。修道院長が帰らなければならない時が来た。二人は抱き合った。「長い年月を経て、こうして出会えたのは素晴らしいことです」と修道院長は言った。「しかし、ここに来た目的はいまだに果たせていません。私の死にかけた修道会を救うために、何か教えてくださることはありませんか？」

「いや、申し訳ありません」とラビは答えた。「アドバイスすることはありません。ただひとつ言えることは、救世主はあなた方のうちの一人だということです」

修道院長が戻ると、仲間の修道士たちが集まってきて尋ねた。「それで、ラビは何と言ったのですか？」

「ラビは助けてくれなかった」と修道院長は答えた。「ただ一緒に泣いて聖典を読んだだけ。私が帰ろうとした時唯一残してくれたのは、救世主は私たちのうちの一人だ、という謎めいた言葉だった。私にはその意味が分からない」

その後、何日も、何週間も、何カ月も、老修道士たちはそのことを考え、ラビの言葉に何か重要な意味があるのだろうかと思った。救世主は私たちの一人？　この修道院にいる私たち修道士の一人という意味だろうか？　そうだとしたら、どの修道士のことだろう？　修道院長のことだろうか？　そうだ、もし誰かのことだとしたら、おそらく父なる修道院長のことだろう。彼は1世代以上にわたって我々のリーダーを務めてきた。一方、トーマス兄を指していたかもしれない。確かにトーマス兄は聖なる人だ。彼が光輝く人であることは誰もが知っている。エルレッド兄でないことは間違いない！エルレッドはときどき気難しいところがある。しかし考えてみると、彼は人々の悩みの種ではあるが、後になれば事実上いつも正しい。しばしば非常に正しい。もしかしたら、ラビはエルレッド兄のことを言ったのかもしれない。フィリップ兄でないことは確かだろう。フィリップはとても消極的で、何者でもない。しかし不思議なことに、必要とされる時にはなぜかいつもそこにいる才能を持っている。魔法のようにそばに現れるのだ。フィリップが救世主なのかもしれない。もちろん、ラビは私のことを言ったのではない。私のことを指しているはずがない。私は普通の人間だ。でも、もしそうだとしたら？私が救世主だとしたら？ああ、神様、私ではありません。私はあなたにとってそのような重要な存在にはなれないですよね？

そうこう思索するうちに老修道士たちは、自分たちの中に救世主がいるかもしれないと、並々ならぬ敬意をもって互いに接するようになった。そして、それぞれの修道士が救世主かもしれないという可能性に賭けて、自分自身を特別に尊重するようになった。

修道院のある森が美しかったので、今でも時折人々は修道院を訪れ、小さな芝生でピクニックをしたり、小道を散策したり、時には朽ち果てた礼拝堂に入って瞑想したりしていた。そうするうちに彼らは意識することなく、5人の老修道士から放射状に広がり、修道院の空気に浸透していく並々ならぬ尊敬のオーラを感じ取った。そこには不思議な魅力があり、説得力さえあった。理由がほとんど分からぬまま、人々はより頻繁に修道院を訪れてピクニックをしたり、遊んだり、祈ったりするようになった。そしてこの特別な場所を見せるために、友人を連れてくるようになった。その友人たちは自分の友人たちを連れてきた。

すると、修道院を訪ねてきた若い男たちが、年老いた修道士たちとどんどん話をするようになった。しばらくして、一人が修道会に入れてくれないかと頼んだ。するとまた一人。そしてまた一人。こうして数年のうちに修道院は再び活気に満ち、ラビの贈り物のおかげで、この地域における光とスピリチュアリティの中心地として栄えるようになった。

M. スコット・ペック医学博士は、1978年最初に出版された画期的なベストセラー、The Road Less Traveled（邦題『愛と心理療法』）の著者。The Different Drum: Community Making and Peace』（1987年）では、個人的な人間関係や社会における礼節の役割を探求している。ハーバード大学とケース・ウェスタン・リザーブ大学を卒業後陸軍医療部隊に勤務、その後精神科の個人診療所を開業した。人生最後の20年間は、1984年に設立に携わった非営利団体 Foundation for Community Encouragement の活動に時間と財力の多くを捧げた。Community Building Instituteが提供する、M.スコット・ペック自身のナレーションによる『ラビの贈り物』のYouTubeビデオ参照。

© 1987 M. Scott Peck
From the prologue of The Different Drum